2012年度　　CB

小　論　文

注　意

1. 問題は全部で4ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

以下の文章を読み，問に答えなさい。

ポストモダニズム[1]が知的世界の様相を一新させて以来，人間の変わらない普遍的性質という意味合いの“人間の本質”という言葉を使うことさえ，はばかれるようになっている。災害を研究してわかるのは，人間の本質は確かに一種類ではなく偶発的だが，少なくとも災害時に現れるそれは，有能で，気前が良く，立ち直りが早く，他人に共感でき，勇敢だ。セラピーの分野では，災害の帰結として，例外なくトラウマが語られる。それは，耐えがたいほどもろい人間性や，自らは行動せず，誰かが何かしてくれるのを待つといった，典型的な被災者像を暗示している。災害映画やマスコミも，災害に遭遇した一般市民を，ヒステリックで卑劣な姿に描き続けている。こういった情報源は，わたしたちに，自身の経験よりも，彼らが描き出す姿のほうを信じろと言っているかのようだ。体験者の多くが経験から人間性の別の面を知っているのだが，それは公的にも，また社会の主流にも，ほとんど認知されていない。(略)わたしは災害に対する普通の人々の反応である廃墟からの蘇生と，それが他の場面でどんな意味をもちうるかを追求する——それは，最悪の事態になったときに，自分が誰であるかを知るために必要なテーマだ。

けれども，その蘇生と，それを妨げ隠しているものの両方を理解するためには，さらに二つのテーマを検討しなくてはならない。一つは，災害時にしばしば粗野な行動に出る，権力の座にある少数派の行動。もう一つは，メディアの思い込みと彼らの役割だ。彼らのかかげる歪んだ鏡の中に，こういったパラダイスと私たちの中にある可能性を見出すことはできない。彼らが何を信じるかは非常に重大で，マスコミとエリートの信じていることが重なりあうと，ハリケーンカトリーナ[2]の直後に彼らが劇的にやってのけたように，二次災害を招きかねない。これらの三つのテーマはほぼすべての災害において織り合わさっているので，最も重要な「束の間のパラダイスの発見」を探ることは，その可能性を覆い隠し，妨害し，時にはもみ消す力を理解することを意味する。

前述の社会的欲求と可能性は，ここ数十年の社会の流れに逆らっている。近年の歴史は民営化の歴史だとも読めるが，それは経済のみならず，社会の民営化でもあった。市場戦略とマスコミが人々の想像力を私生活や私的な満足に振り向け，市民は消

費者と定義し直され，社会的なものへの参加が低下した結果，共同体や個々人のもつ政治力は弱まり，民衆の感情や満足を表す言葉さえ消えつつある。“フリーアソシエーション(自由に誰とでも係わり合いになれる権利や能力)”とはよく言ったもので，それでは深い人間関係はできない。代わりにわたしたちはマスコミや宣伝により，互いを怖がり，社会生活を危険で面倒なものだと見なし，安全が確保された場所に住んで，電子機器でコミュニケーションを取り，情報を人からではなくマスコミから得るようううながされる。だが，災害が起きると，人々は集まる。この集まりを暴徒と見なして恐れる人もいるが，多くの人はパラダイスに近い市民社会の体験としていとおしく思う。“民営化”という現代語は一般的には経済用語で，鉄道，水利権，警察活動，教育などにおける法的権限，商品，サービス，権力の，民間企業と予測につかない市場への委託である。しかし，経済的な民営化は，“わたしたちは互いの番人ではない”という着想と願望なくしては実現不可能だ。被災者を社会的な集団生活に引き戻す災害は，この民営化——これ自体が，ゆっくり進行する巧妙な災害——の幾分かを逆戻りさせる。市民の社会への参加，活動，目的，自由がすべてほどよく存在している社会では，災害は単なる災害で収まるだろう。

今では不可能なほど遠い存在として語る以外，パラダイスについて語る人はほとんどいない。私たちが耳にする理想社会は，アダムとイブの堕落以前の原始社会や，人里離れたヒマラヤのどこかにある霊的な王国など，たいがいはるか遠くにあるか，大昔にあったか，またはその両方だ。それはすなわち，今ここで，わたしたちがそのような理想的生活を送るのがいかに不可能であるかを示唆している。けれども，時折だが，わたしたちの間にパラダイスが閃光のように出現したら，どうなるだろう——それも，最悪の状況で？　もし，地獄の縁でそれを垣間見たなら？　その閃光は大昔のどこか遠くにあるパラダイスと違い，わたしたちが実はどんな人間で，わたしたちの社会がどんなに違ったものになりうるかを見せてくれる。それは，危機に底力を発揮するパラダイスである。それは，自らの可能性をまったく開花させることなく縮こまり，憂鬱な社会に甘んじているわたしたちの普段の姿とのコントラストにより指し示される。多くの人々は今ではよりよい社会など望んですらいないが，とはいえ，それに出会えば，はっきりと認知し，その発見は彼らの体験の無名性を通しても光り輝く。中にはそれを認めるなり，しっかりつかみ，利用する人たちもいる。そして，良

くも悪くも，長期的な社会的政治変革が瓦礫の中から生じる。今の時代，パラダイスがあるとすれば，そこへの扉は地獄の中にある。

エマージェンシー(emergency 緊急事態)という語はエマージ(emerge 現れ出る)から生じていて，その反対語のマージ(merge)はラテン語のメルゲレ(mergere 液体に沈められた，浸された)から派生している。“緊急事態”は普通の状態からの分離であり，新しい空気の中への突然の侵入を意味し，そこではわたしたちは危急の事態に際して上手く対処することが求められる。カタストロフ(大惨事)という言葉は，ギリシャ語のカタ(kata 下へ)と，ストレイフェン(streiphen ひっくりかえす)から来ている。カタストロフは予想外の展開を意味し，かつてはストーリーのどんでん返しを意味していた。予想外の状況になることは必ずしも悪くはないが，これらの言葉は悪運を暗示するようになった。ディザースター(disaster 災害)はラテン語のディス(dis 離れて，～なしで)とアストロ(astoro 星，惑星)の合成語で，文字どおり，星のない状態を表す。もともとそれはブルースミュージシャンのアルバート・キングのヒット曲「悪い星の下に」にあるように，占星術が作り出した不運を意味していた。

1965年と2003年のアメリカ北東部大停電，1989年に起きたサンフランシスコ湾のロマプリエタ地震，2005年にメキシコ湾を襲ったハリケーンカトリーナなど，20世紀のいくつかの災害では，停電の結果，夜空を覆い隠していた人工的な光が消滅し，人々は気づくと，僻地で見られるような満天の星の下にいた。2003年の8月15日にアメリカ北東部に大停電が発生すると，その日の暖かい夜，ニューヨーク市では天の川が見られ，長く失われていた夢のような世界が広がったのだった。現在の社会秩序は人工的な明りに近いもの，すなわち緊急時には役に立たないパワーの一つだと考えることができる。代わって出現するのは，人々が助け合い，協力する，即席の地域社会だ。突然見えるようになった夜空の星がどんなに美しくても，今日，その明りを頼りに道を見つけられる人はいない。けれども，団結と利他主義と即時対応性でできた星座は大半の人々の中にすでにあり，大事な場面では，それが現れる。災害が起きたとき，人々はどうすべきかを知っている。パワーの喪失は現代の感覚では災害であり，苦痛をもたらすが，こういった古きよき天国の再現は苦痛とは正反対のものだ。それは地獄から入るパラダイスなのだ。

(レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』、亜紀書房・一部表記を変更)

注1　ポストモダニズムとは，近代社会の限界を意識し，近代的な価値を超えることを目指す文化芸術思想や建築運動。近代的主体に対して懐疑的であることをその特徴とする。

注2　ハリケーンカトリーナは2005年8月に発生した熱帯性暴風。アメリカのルイジアナ州やミシシッピー州などに甚大な被害を与えた。救援活動の遅れとともに，暴徒による略奪などの煽動的な報道がなされたことから，暴徒と間違えられた市民が警官に銃殺されたり，州兵が市民に銃を向けるなど，政府の対応に多くの問題を残した。

問　1755年11月1日に起きたリスボン大地震は，ヴォルテールやルソーなど多くの知識人に衝撃を与え，ヨーロッパ近代啓蒙精神を生み出す契機となったと言われている。2011年3月11日の東日本大震災の(A)地震と津波、(B)福島第一原子力発電所の事故は，日本社会の将来に大きな影響を与えることになるかもしれない。上記文章を読み，アンダーライン部分の「三つのテーマ」に関わらせながら，(A)あるいは(B)のいずれかを論題に選び，それぞれの災害が，これからの日本社会に与えると思われる影響と，その影響をよりよき未来の方向に向けるための「文化の力」とはどのようなものかについて600字以上800字以内で論述しなさい。

(解答用紙冒頭に、選んだ論題を(A)あるいは(B)と記し，論題として選択した理由を述べたうえ，自己の見解を論述すること。両方を解答した場合は，最初に論述されたもののみ採点される)。